

神奈川県自閉症児・者親の会連合会総会記念講演会

自閉症の人々のライフサイクルを通して教えられること

～情動と認知の関連性について考える～

講師 東海大学健康科学部社会福祉学科教授
東海大学病院精神科非常勤医師

小林 隆 児 先生

日時 1996年6月16日(日) 午後2時～4時

会場 鎌倉市福祉センター 2階 第1・2会議室

皆さん今日は、小林でございます。

今日はこういう貴重な場に声をかけて下さりましてありがとうございます。

私は九州から、はるばるこちらに参りまして3年目を迎えました。何事も3年目の危機というものがあるんですけど、3年目の危機というより、3年目にしてどうにかこちらの人・気候・飲み水・食べ物に慣れてきて、大変居心地が良くなってまいりました。

私は、医者の世界に入って医学部で13年間を過ごし、その後6年間を教育学部で障害児教育の関係の仕事をして、そして回り廻って福祉の世界に入りました。医療では飽き足らず、教育でも飽き足らず、福祉の世界に入ってきました。

昭和45年、ちょうど私が二十歳、成人を迎えた年、自閉症の人との出会いが始まりまして、長い間週に一度土曜日の午後につき合っていました。学生時代からお付き合いしている人たちがたくさんいたものですから、青年期・成人期のお子さんのことをいろいろ学んできました。それを通して私なりの自閉症の人たちへの理解を深めて今日まで来たような気がします。

今日は年長の彼らの、子どもから大人になって行くプロセスの中で、色々の時点で、人間の一生にとって、この事が一番大切だなと思う、核心に触れる所をお話してみようと思うわけです。

1. 情動力と認知

自閉症の理解というものが、言語とか認知を中心にして語られ、理解され、療育が組み立てられている、という流れが今日非常に強いことを常日頃感じています。しかし、言語とか、認知というものが、人間にとってどのようなプロセスを経て獲得されていくのか。自閉症の人は言語とか認知の働きを自分で獲得するというところに非常な弱さがあるとよく言われています。これは確かだろうと思います。そして、それを主に脳の働き具合の程度というか、脳の問題として語られる事が非常に多いと思うわけです。脳障害、言語の認知障害として事が語られやすい。もちろん、確かに脳の働きを抜きにして獲得することはできないでしょう。しかし、赤ちゃんの時代から考えてみると、脳がだんだん成長していけば言語や認知の働きが自然に身に付いてくるのか、脳の障害が基盤にあるとどう努力しようと限界があるのかと考えてみると、そう単純に割り切れないだろうと思います。

やっこの頃、言語・認知の働きというものを人間はどのようなプロセスを経て獲得していくかを考えないと、自閉症理解は深まらないという考えが主張されるようになってきているようです。

そこで私は、認知の働きといったものが、人間にとって、そして自閉症の子どもにとって、どういうプロセスを経て獲得されるのか、ないしは獲得できそうでできないのか、そんな話をしようと思うわけです。

つまり、そこには鍵を握る概念として「情動」という事があるんだと思っております。「情動」という言葉は、まだ皆様にとっては聞き慣れない言葉でしょうが、情緒とか感情と言い換えてもいいかもしれません。知・情・意という概念がありますね。この3つを人間の精神機能としてとらえる考え方がありますが、これらが互いにどういう関係にあるのかということを考えてみようと思います。

2. 自閉症児の情緒発達 ～ある11歳の男児の例を通して～

11歳の時にひどいパニックで相談に来られた親子です。人に噛みつくという他害が主訴でした。親御さんにとってこの他害が一番困りますね。人様に迷惑をかけるよりも、自分の手を噛んでいてくれる位なら何とか我慢できるということがあるかもしれません。とにかく噛みつくので担任の先生が往生したのでしょうか、人に噛みつくから脳に障害があるのではないかと思て、学校で病院に行つて脳波を取ってもらえと言われたので来たというんですね。勿論、脳波を取りましたけれど、典型的なカナーの言うような自閉症のお子さんでした。中程度の精神発達の遅れがあり、物凄くこだわりがありました。診察室に来てまず何をするかと言うと、私の予約ノートを見て、次の診察日は何月何日と彼が指定するのです。私に特別の予定がなければ、「わかったわかった」と次の予定日を決めます。すると彼はもう満足して帰ろうとするんです。これで診療が成り立つと本当に楽で双方とも平和だなと思います。毎日、何曜日の何時には何をするというスケジュールが全部決まっています、ちょっとでもそれがずれると物凄いパニックを起こしていました。緊急事態ですからその時は消火活動をするわけです。消火活動、鎮静化の為に薬を使わざるを得ません。とにかく危機的状態から脱する事を先ずやりますね。そういう意味では薬というものは大変役立つのですが、その後が問題ですね。なぜこんなふうになってきたかといういろいろ考える訳です。あまり一般化できる話ではないけれども、その子の家庭の事情は複雑でした。三世代同居で、体を診察してみるとタバコを押しつけられた跡があったのです。躰と称して虐待のようなことを受けたということをお母さんから聞きました。かなり深刻な状況があったわけです。恐らくそこまで追い詰められたために人に噛みつくまでになったのかなあという気がしました。お母さん自身が、嫁姑の関係ですとか、ご主人との関係で非常に悩んでいて、子どもに対して母親らしい振る舞いができないという心理状態にありました。お母さんの気持ちを支えて行くことが非常に大事だと思って面接を続けました。

お母さんが「こんなことをやった、こんなことがあった」と経過を話されるのを聞いて、その時私は、お子さんのその時の気持ちなどをできるだけ翻訳してお伝えするという作業をずっとやって、それを通して、お母さんは子どもの気持ちをだんだんと理解できるようになっていきました。そしてある時お母さんは一大決心をされて、とことん自分でこの子をもう一度子育てし直そうという気持ちになりました。父親とうまくやれそうにないということで離婚されました。親子3人、お姉ちゃんと3人暮らしで生活を立て直されました。それから後の経過から、私がこういったお子さんの発達の援助をするためにどんなことをすべきか大変教えられたわけです。

お母さんはそれから、お子さんの気持ちがどうなのかを中心にして育児をやり直してこられたと思うのです。それでどういうことが起こったかと言うと、子どもがお母さんに赤ちゃんのように甘えてくるようになった。いわゆる依存関係が深まって、テレビで子どもの体操などを、見て、お母さんと一緒に跳んだりはねたりして楽しみ始めました。そして、お母さんとの二人の関係に満足したのでしょうか、次第に他の子どもたちがやっていることに関心が移り、非常に情緒安定が図られ、間もなく学習にも没頭するようになってきて、言葉や表現力も次第に伸びてきました。子ども集団の中に本人が入ってきましたね。家の中では、お母さんが家事をやっていると、針仕事でも台所仕事でも、見てそれを真似して、

家事も一生懸命楽しみ始めました。お母さんと子どもとの関係もそんな状態ですから非常にいい感じできまして、創造的な活動をさかんにするようになってきました。そういう活動は一般的には小学校の3・4年生頃に非常に深まっていくといわれていますが、そういう姿が彼にも見られるようになってきました。

それから間もなく、お母さんがもう少しその子の世界を広げてやらなくてはと思われて、ボーイスカウトに入れて、富士山の合宿に参加させてみようと思われた。そういうことがお子さんの成長に一段と拍車をかけたわけです。その頃、思いがけないことに、お母さんが急病で倒れ、お姉ちゃんと二人で家で過ごさなければならない事態になりました。それが契機となって彼は一段としっかりし、自分のことは自分でやるようになり、お母さんがいなくても特に精神的におかしくなるということもなくなり、親離れができるようになっていきました。それと同時に感心したのは、お母さんも子離れのために好きだったバドミントンに没頭することによって、親離れ子離れが母子同時におこり、スムーズに展開していったんですね。

それから間もなく、自閉症の人たちのための施設ができて、家族の希望で入所したけれど、心理的な成長の後だったものですから、施設に入ってからでも優等生です。一週間に一度お母さんに会うのを、お母さんも子どもに会うのを楽しみになりはじめ、非常に好ましい親子関係へと発展していったわけです。

私は、この親子とお付き合いをしていて、自閉症の人も我々も皆同じような心の発達、情緒の発達を遂げるんだなあということを教えられましたし、確信を持ちました。ある意味では思春期にさしかかる段階からの危機的状態にあった自閉症の人のそれを回避した後の情緒発達の経過という事で話をしましたが、言語とか認知発達の側面ではなく、このような情緒発達の側面をみると彼らも我々とほとんど同じだと考えていいんだらうと思います。そういうことを大切にしながら、九州でいろいろな仲間と自閉症の人々への援助を行ってきたわけです。1990年に彼らの追跡調査をやりました。世界で最も多くのケースの長期にわたる追跡調査でしたが、四分の一の人が就労ないし自立という好ましい状態に達していることが明らかになったのです。

勿論、学習面の指導なども大切にやられていましたが、それはあくまでも本人がそういうものに対して自発的に、生きた学習をする、そういう姿勢があったから身に付き、それが後に役立っていると私は思うのです。

今お話ししてきました情緒発達と、一方では認知発達と言語発達というものが、どういう関係にあるのかという事は今までの話ではまだ説明しておりませんが、非常にまずい関係で展開していくとどうなるのかという例をお話ししてみようと思います。非常に悲惨な状態の相談を私はたくさん受けています。

その典型的な例をお示しします。

3. 自我意識や自分の言動すべてが不確かになってしまった例から

～ 成人期の女性の治療から ～

25才のときに相談にこられた女の人です。幼児期に軽度の発達遅れの遅れしかなく将来を囁望されるような人でした。お母さんも、親の会で中心になって非常に頑張られました。まわりの期待もあるし、お母さんも本人にすごく期待し、学習の手助け、指導を毎日欠かさず一生懸命されたんです。

相談に来られた時は、非常に深刻な状態だったんですけど、高校を卒業し、就労できていたのです。しかしまもなく人の顔を見れなくなった。人の顔が見れないので職場で人と付き合えない、交流できないので仕事がだんだんできなくなった。そして、みんなの顔が輝いて美しい、自分だけ醜いという、容貌容姿への強いこだわりが出て、人と目と目が合わせられない深刻な状態になったのです。お母さんとは大変な緊張関係、対立関係にあって、一緒に住んでいていつお母さんはこの子に襲われるかとびくびくした状態でした。

その子が言うには、お母さんはとにかく奇麗だと、私はとにかく醜くて、自閉症だから醜いというようなことをいうわけです。実際そのお母さんはとても奇麗だったんですよ。お母さんが奇麗というのは当たっているもので、なるほどと思いましたが、僕も含めてまわりの人も皆奇麗に輝いているというものですから、ちょっとおかしいなと思いました。どう考えてもあまり奇麗でない人もいたものですから。

いろいろ細かい治療があったんですが、全部省略しますが、一年以上たってやっと、お母さんと彼女との関係が次第に鎮静して落ち着いてきました。そうしはじめると、彼女は別の悩みを訴え始めたのです。それは私にとって驚きだったのですが、こんなことを言い始めました。

「私、毎日毎日ずーっと悲しみが続きっぱなしで、洗濯の時でも、部屋の掃除の時でも、ぞうきんで廊下を何回も拭く時でも、朝昼晩ご飯を食べている時でも、食事の後、茶碗やお碗や小皿、大皿、小鉢、コップに湯飲み、みんなのお箸、スプーン全部洗って乾燥機に入れる時も、布団を干したり・・・昼寝や夜寝て布団の中に入って空気を吸う時も・・・」全部読み上げる時間がありませんから途中で切りますが、一言で言えば、自分が一日生活する動作全てに渡って何をやっている時でもいつも悲しみが襲ってくるということなんです。

お母さんは彼女の様子を見ていてこんなふうに解釈されました。

「あの子は歩く時にも、転ばないように気をつける。右足だったり左足だったりというふうに意識的に動作をしないと移れない。あの子の訴えを聞いていると、どうも何をすることもすぐに動作に移れないようだ。意識的にやらないと何もやれない。」

お母さんはよくおっしゃったと思います。全ての動作を意識的にやらないとできない。分かりますか、これはすごい悩みですよ。全ての動作を意識的にやらないとできない、だから悲しくなる。彼女のいう「悲しみ」は、通常我々がいだく意味とちょっとずれがあると思いますが、とにかく全ての動作を意識的にやらないと苦しい。意識的にやらなくてはいけないから苦しいということだろうと思います。自然に振る舞えないんですね。

彼女と私は診察室で座って相對していますけど、彼女は私の声の大きさと訴えるんです。確かに僕の声は大きいんですね。それはよく分かるんですが、自然の動作をしてほしいというんです。私はちょっと前屈みになって、彼女に近づいているいろいろ話を聴こうとすると、ちゃんと椅子にもたれて自然な動作をしろと言うんです。背もたれにもたれてじっとしていることが彼女にとっては自然な動作なんですよ。ちょろちょろ前に出て身振りを交

えてというのは彼女にとって自然の動作ではない。

つまり、彼女にとっては自然な振る舞いということはある一定の状態を保ち続けることなのです。常に動きがある、瞬間瞬間変化するようなものっていうのは彼女にとっては自然なものではないのですね。我々の言う自然と彼女の言う自然とは全く相反する意味を持っているのですね。毎日の動作など一見同じようなことをやっているようですが、厳密に言えば全く同じ振る舞いをしているということはないんです。常になんらかのパリエーションがあるわけですね。彼女にとって、全ての動作が我々の言うように自然に振る舞えない。つまり、通常の自我意識、自分に対する意識がどうも彼女にとっては非常に安定したものとなっていない。瞬間瞬間、常に彼女は意識しないといられないという状態ですね。全てが自分のものになっていないということですね。これは自閉症の中で知的に優秀な人でこういうことがよく起こるんですね。

その他にこんな例がありました。将棋の名人だったんですが、小学校5年生のときに初めて会いました。その時アマチュア2級でした。

彼は4才の時IQ78、5才で88、6才小学校に入るとき130、どんどんIQが上がっていった。非常に伸び盛りで、文字などを教えなくても覚えて優秀なお子さんでした。その子が高校に入った後ものすごく苦しみ出したんですね。自分の名前がどうして〇〇というんだとか真顔で訴えるんですね。小学校5年の時初めて相談を受けた後に、情緒障害学級に入った方がいいのではないかと進めたんですよ。アスペルガー症候群だと思いました。それをきっかけにして、なぜ自分は情緒学級に入らなければならないのか、なぜ自分は皆とは違うのか、といったことをものすごく苦しみはじめて、精神科で私が会った時でもその後すぐに親に、「おれって精神病なのか」と訴えているんです。

その時、自分はまわりの人と違う、何故違うのか、という感覚を持ち始めたんですね。そのため、精神科にこられなくなって、小児科に来るようになり、小児科の先生を通して話を聞いたんですが、名前にまつわることもそうですが、自分は何故生きているのか、何故回り自分とが違うのか、自分自身の中に拠って立つ基盤、そういうことに関して全てが疑問に思えてきたわけです。死にたい、死にたいと訴えだしてきて、自殺すると言い出しました。

私は、自閉症の人の持っている一番の根源的不安はそこだろうと思っています。先ほどの25才の女性の悩みと同じだと思ったのです。

中学の時にはいじめられ、その体験がパーッとよみがえって、「あいつを殺す！」とカーッとなるというようなタイムスリップ現象がみられるようになった。学校に行けなくなり、夜中に家を飛び出して徘徊し、捜索願いをだして警察に捜してもらおうとか、そういう状態になってきました。

今話した二人のお子さんは、現場では非常に期待されていた方たちでした。周りも期待し、親もこれくらいできるならこういう事もしようと、非常に高い目標を設定して頑張っただけでこられた。そんな彼らがこのような状態になってしまうことがあるんですね。

自閉症の人にとって自我意識、言葉など、そういうもの全てが不確実なもの、自分にとって頼りにならない、心もとないものだ、そういう感情を彼らはとても持っています。自我意識は、自分が拠って立つ基盤をしっかりと持っているかどうかにはずいぶんかかっています。そういうものが脆弱でもろいということが自閉症の人にある。知的発達基盤にどうい

ものが無い事によって自閉症の人がこのように追い詰められて、今言ったような状態に陥ってしまうのかを我々はよく考える必要があると思います。

4. 認知機能の発達と社会性の発達の関連性について ～ 最近の乳幼児発達心理学から学ぶこと ～

先ほど思春期にさしかかった人のその後の変化をお伝えしましたが、思春期の発達はまだ一度赤ちゃんからの発達をやり直すという側面があるとよく言われます。もう一度、親と子の間で母子分離が展開していく、それによってはじめて自分なりの自立した気持ちが育ち、親から離れて自立した大人になって行くというようなことを言われます。

自閉症の人の情緒発達にもそういう点が非常に認められるということは、最近私もずっと主張してきました。この考え方をこの頃はだれでも認めてくださるようになりましたが、では乳幼児期にはどうなのかと言うとよく判っていないのですよ。何故判っていないのかいろいろ理由はあると思うのですが、彼らの情緒発達という側面から、自閉症の人をつぶさに観察し研究している人が極めて少ないということ、3・4歳以降しばらくしてからでないとならば彼らに遭遇しないということがある。彼らの乳幼児期を過去のデータでしか理解する術がないということも大きな理由だろうし、また、言語認知発達の障害が自閉症の人たちにはもともと備わっているという認識が前提にあり、そういう形で子ども達を観る。そういった彼らのできない部分にだけ目が行きやすい。彼らの乳幼児期の情緒発達というところにどうも目が行かなくなっているという一面があるのではないのでしょうか。

乳幼児期に一般の普通の子ども達はどのような情緒発達、心の発達を経ながら言語とか認知と言われるものを獲得していくのか、そのあたりのプロセスが最近の乳幼児発達心理学研究では非常に詳しく判るようになってきた。この20年間のことですが、一般の子どもについては判るようになってきた。しかし、自閉症のお子さんに対しては、そういった視点から研究している人はまだ世界でも本当に数える程しかいないと思うわけです。

そこでそもそも、言語機能というものはどのようなことなのか考えてみたいわけです。

言語機能というのは、もともと人間に生来的に、ある種のプログラムがそなわっていて、脳の成熟過程でそうした機能が育っていくと考える人もいます。しかし、言語というのは、実はそう単純なことではないのです。勿論脳機能の成熟ということが関係していることは確かです。我々は、常日ごろ言葉を使っている訳ですが、「はな」と言う言葉一つとっても色々な花がありますね。いろんな種類があることは勿論ですが、例えば紫陽花と言っても色や形、新鮮度、量感から質感全てちがうわけですよ。人といっても、ここに百数十人いらっしゃるとは、皆違う、それを我々は「人」というふうに言っています。それくらい色々なものと色々な事象、例えば紫陽花ですと、質感、色彩、新鮮度などすべて違うけれど、その中である共通の属性を取り出してそれをある言葉で表現している訳です。言葉というものはそういう機能、働きを持っているわけです。それを我々は概念化ないしは抽象化と言っています。

私がそこで強調したかったのは、色々な物事、事象は全てさまざまな属性を持っています。それが一つ一つ全部違う。しかしその中である共通した属性を取り出し、言葉に置き換える、抽象化という作業をしますが、共通の属性を取り出すその作業は、実は我々人間

同士の交流を通してしかできないのです。

例えば、「山」という言葉から連想する山も人によって違う。ある人は富士山であり、育った地域によってはなだらかな丘のような山だったりするわけです。山の属性の共通性ということはどういうことなのか考えますね。これは一般的な話で非常にわかりにくいかもしれません。

例えばお子さんの例で、特に自閉症の小さい子と親とのやり取りの流れをみると、例えば我々はこれをコップと称して水を注いで飲むという働きのある物として、そういう属性を取り出してコップと表現しているわけですが、自閉症のお子さんはこれを見て光がちらちら揺れて動いている輝きに熱中しているかもしれない。子どもがそこに思いを寄せている時に「それコップよ」とか言って教えようと思いますね。彼が喉が乾いて水を飲みたい時水を注いでもらって水を飲む、そういうコップを持って「これコップよ」と言われると、「ああ喉が乾いたときに水を注いでもらった、そしてあれで飲んだ、あのときのものがコップというのか、というふうにしてコップの本来の属性というものが彼にとってもぴったりとくる。けれども、自閉症の人たちは我々と違ったところに着目をし、熱中しますね。その時に周りの人がその物の一般的な意味というものを色々働きかけても、それは子どもにとっては全くずれたコミュニケーションの展開、指導になってしまうのです。

育児の過程で子どもは大人たちとの密接な交流を通して物事の認識の仕方をおのずと習得していきます。共通の認識を持つというのは、我々が生まれてから大人になるまでの間に色々な人から教わって来たものを身に付けて、それを基に子どもに働きかけをしている。言葉というものはまさにそうです。

認知というものを考えてみると、我々が生まれ育った文化的背景を持って暗黙の共通の認識をすることが正しい意味で認知することだと思えます。その一つとして言葉というものがあるだろうと思うのです。

共通の認識を持つというのは、一緒に生活をし、一緒に思いでもって、一緒にことを体験し蓄積していく。蓄積した先に共通の認識が生まれるわけです。

共通の基盤、生活の基盤、体験の基盤がないと共通の認識というものが生まれようが無い。どういうことかと言うと、水を飲む道具としてコップという共通の認識を持っているが、しかし、そういう形で水を飲んだことがない人、手ですくってしか水を飲んだ事の無い人は共通の認識を持ちようがない。もしもコップを光り輝くピカピカ光る美しいものとして彼自身が知覚しているとすれば、全く別の意味合いを持つと思えます。

何故こんな話をしたのかというと、決して脳が一人勝手にだんだん成熟していく過程で認知機能は生まれ育っていくのではないということを言いたいわけです。人と一緒に、一緒に思いで、一緒に事をやり、同じものに着目してその中ではじめて互いの中で共通の認識が持てるようになっていくんだということなんですね。

5. 情動、社会性（コミュニケーション）、認知の関連性について

情動とコミュニケーションの関連性ということでお話しようと思います。

一般的に乳幼児の社会性はどのように発達していくか考えてみたいと思います。まず、その子を中心になって育てている人、多いのが母親でしょうから、母親と赤ちゃんとの間にまず気持ちが通じ合うということが大前提になるわけですね。気持ちが通じ合うということは、我々に取ってみるとごく単純で簡単そうですが、実はそうではないんですね。そこに一番困難さを持っている人が自閉症とされています。気持ちが通じ合う関係になっていますと、その子がどのような気持ちでいるのか手に取るように判ってきますね。今泣いているのはお腹が空いているのだとか、本能的につかめるようになって来ます。子どもの気持ち・意図が感じ取れるようになってきます。気持ちがお互いに通じ合う関係になっていくわけです。情動が共有されてはじめて相手の意図が通じ合える。本来なら人間というのは通じ合えるものを持っているわけです。

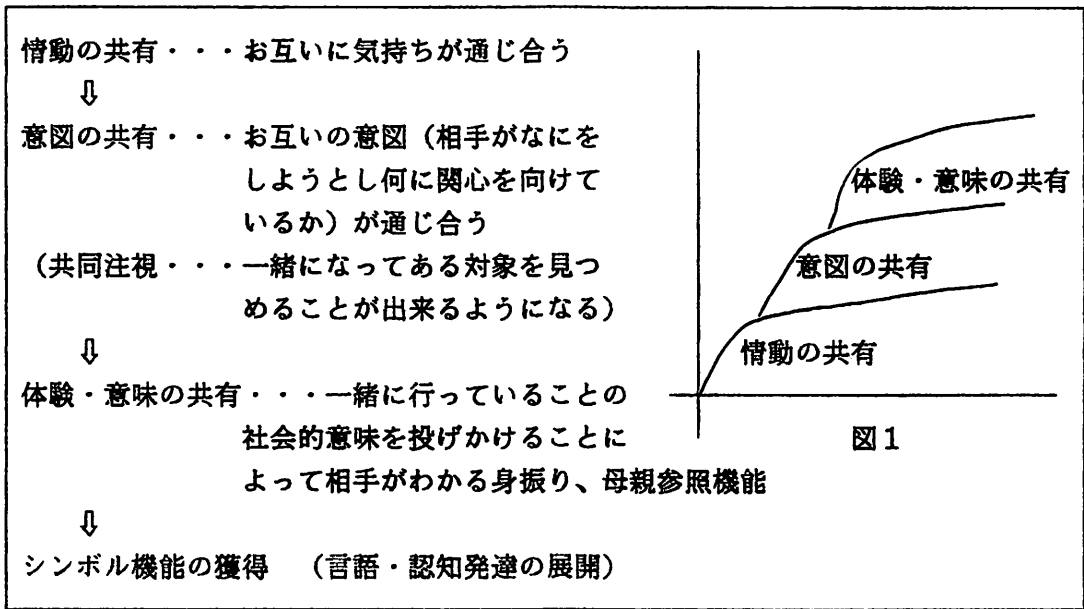
そういう関係になってきますと、子どもがコップを一生懸命に見ている時に、何か飲みそうにしているのではなく、ピカピカ光っているのに心をときめかせていると簡単に分かるわけです。その時は「ああそれコップね」とは言いませんね。「ああ綺麗ね。ピカピカしているね」と言うでしょ。

自閉症の子と我々が、療育という関係あるいは医療という関係で関わっている時というのは、そういうずれをいつも起こしていると思います。何故かという気持ちが通じ合っていない。相手の意図、何に気持ちが向かっているか判らないからですね。互いの気持ちと意図がピッタリと両者の間で一致していきますと、同じような思いの中で色々なことを体験するわけですね。幼児期の頃でいえば、“にぎにぎ、おつむてん”とか身振りを赤ちゃんとの間で一生懸命やろうとするわけですね。それは、我々が小さい時に親との間で体験してきてその中で身に付けたものです。つまり、我々が一番最初に赤ちゃんに働きかける身振りというものは、文化的意味を持っているのです。どういう事かという、人との交流を通さなくて、子ども一人の中で身振りができて、身振りの意味が体得されていくということではないのです。必ず親との間で豊かな気持ちの交流がある中で身振りの意味を教わっているわけです。

つまり、心の交流の豊かな環境の中で色々な体験をしていく、そうした遊びの中で、我々は知らず知らずのうちに色々な意味を投げかけているわけです。それは言葉かけと同時に、喜び悲しみの感情などを、色々な体験全てに渡って、実は子どもに意識しない形で働きかけているわけです。色々な体験の意味というものを親から投げかけられる。体験の場でそれが蓄積されていくわけです。その蓄積の先に言語、認知の機能が備わってくると我々は考えねばならない。このような流れがシンボル機能の獲得にたどり着く道だと思うわけです。

今の話を図にまとめてみると図1のようになります。

まず両方の関係の基盤に気持ちが通い合う情動の共有が無くてはならない。それが段々深まっていくと、知らず知らずのうちにお互いの意図・気持ちが分かるようになる。気持ちが深まっていくと、互いに容易に通じ合うようになる。気持ちが通じ合う関係になって色々な遊びをやっていくとその遊びが生きた体験になる。そうなる最高に楽しいですよ。



一生懸命遊んでいる時は、色々な声を出し、ジェスチャーで相手の気を引こうとしたりしています。そういう時に声に出している働きかけは非常に大切なんですよ。

今話したような順序を踏まないとその体験の本来の意味が学べないのです。

自閉症の人の言語認知障害の究極の問題というのはこのような段階を踏まえた体験の蓄積ができていなくて、崩れた形で体験と、意味を獲得しようとしているところがあると思います。そのために非常に虚しい学習が行われて、先ほどお話ししたような、彼らの実存的な苦しみが出てくるのだらうと思うのです。

抽象機能、抽象化は、シンボル機能のことですが、シンボル機能を用いて我々はコミュニケーションしています。身振りもある種の意味を持っています。身振りも含めて全て我々は共通認識を持っていて、言葉、身振りを通してコミュニケーションが展開されていきます。でも、コミュニケーション、つまり人と人との通い合いというのは、そういうレベルのものだけではないわけですね。何かというと、先ほどから言っている気持ちの通い合いという、これを情動的コミュニケーションというのですけれど、情動水準でのコミュニケーションがあるのです。本来、情動的コミュニケーションは生まれて生後1～2ヶ月位から急速に深まっていくんです。

6. コミュニケーションの発達の方角性

情動水準のコミュニケーションと、シンボル機能水準のコミュニケーションとは、全く違うんです。そこを我々は認識していなくていけません。それはどういう事かと言いますと、情動水準のコミュニケーションというのは音叉が共振するような特性をもっています。二つの同じ周波数の音叉の一つを叩いて鳴らさともう一つも共振するような現象ととても似ているといわれます。

シンボル機能水準のコミュニケーションはファックスのような伝わり方をします。たし

かに ファックスというのは役に立ちます。余計な気を使わなくて、正確に伝わる。我々の日頃のコミュニケーションはファックス的なものが多くを占めています。

7. 自閉症児では情動的コミュニケーションがどのように進展していくか

情動水準のコミュニケーションとは人間に生来的に備わったごく発達早期に発生してくるものです。

自閉症の人の乳幼児期に記録されていたホームビデオを分析してみると、最初はず、対人反応の乏しさというものが認められます。その後は言葉がなかなか出てこないということ、その後段々こだわりが出てきますよね。その三つが揃って自閉症と診断されるんでしょうね。

よく対人反応の欠如と言いますね。彼らは本当に対人反応が欠如しているのかということ実はそうではないと思うんです。自閉症の子が誰かと遊んでいると、その人の存在をとて意識して反応を示すんですね。ただ何が特徴かということ、普通の子と自閉症の子で人との交流の違いの特徴は、普通の子どもにとって脅威的と感じるような接近をされると誰でも逃げていきます。対人接触を回避するわけですが、そでない接近をしても自閉症の人は回避する傾向がとても強いという特徴をもっています。そこで、自閉症に人たちの心理状態はどうなのかと考えなくてはいけないと思うのです。一言で言うと、人の心には必ず接近したい欲求があるんですね。しかし、一方で回避したい欲求があるんですよ。人間の気持ちには必ず相反する気持ちがあります。自閉症の人とお母さんのやり取りを見ていますと、確かに回避する。親は一生懸命働きかけても逃げるんです。でも、そと親の背中にまわって近づこうとしたり、さりげなく近づいているということもよくみられます。自閉症の子どもは非常に接近欲求が弱いんですね。回避欲求がものすごく強いんです。それが蓄積されています。これには色々な理由があるわけです。色々な刺激に対してすごく過敏であるとか、知覚の中で自閉症の人とか赤ちゃんは物を見聞きする知覚の仕方が我々とは全然違うんです。その場の持っている雰囲気にもものすごく敏感なんです。自閉症の人は一生その生々しい知覚を持ち続けていると思うのです。

そうすると、生々しい刺激から逃げる術は回避するしかないんですね。彼らにはそういう特異的な知覚の仕方があるわけです。

しかし、一方では、子どもの欲求をこちらがうまくつかめなくて益々働きかけが強まっていく傾向にあるのですけれど、こういう時にどうしたら良いか。彼らには近づきたい、離れたいという相反する気持ちが同時に強く存在するわけです。これをアンビバレンスといいます。これを緩和してあげなくてはいけないんですよ。どうしたら良いか、我々が彼らにとって脅威的存在でなくなるということが大事なんですけれど、難しいことです。

一番まずい方法は無理をして視線を合わせようとする事です。僕はこういう時、視線を合わせないようにしてくださいと、さりげなくやるようにしているんですが、「ちゃんと向こうを見て」とか「きちんと手をふって」とか指示するのは好ましくないと思うんですが、一般的の共通認識として「ちゃんと相手の目を見て、きちんと挨拶をする」というのが品のある行為だというわけです。そうなんですけど、彼らの気持ちを考えると最初は

あまりそのことに触れない方がいいですね。とにかく目は極力合わせないように持っていく方が彼らにとってわれわれが脅威的存在になりません。一番良いのは、相手の目に触れないように後ろから迫ることかもしれません。あるお子さんの場合、明らかに近づきたいという気持ちが見えたので「タイミングを見てスーッと受け入れておんぶを一生懸命やってあげて」とお母さんに助言をしたんですね。そうするとお母さんが脅威の存在にならなくて非常に安心して心地良い存在になった。おんぶしながら遊んでいると、この子はものすごく親に愛着を示すようになってきました。アタッチメント、愛着については、自閉症の言語認知障害説を唱えたラターが最近再評価をする論文を書いています。以前は「愛着」について強く批判していたんですが、愛着の重要性を抜きにして、言語・認知の発達を考えられないということだろうと思うのです。

自閉症に見られる言語・認知の発達の関係はまだよく判っていないんですけど、とにかくアンビバレントな状態を壊す、つまり、接近したい気持ちが前面に出るように、安心したい気持ちが出るようにすることです。抱っこするのもいいんですね。抱っこすると最初のうちは彼らはパニックを起こします。癩癩を起こして抱かれることに恐怖しますね。20～30分辛抱して、我慢してお母さんに抱っこしてもらっていると段々収まって、非常に親に対してピタッとすがってくるようになりますね。こういうことを蓄積していくと、アンビバレントな気持ちが緩和して、愛着行動がものすごく出てきます。

そういう事から始まって二人の関係が深まっていくわけですね。接近恐怖を持っている限りはその人との間で気持ちの通じ合いは出来ません。気持ちの通じ合わない関係で色々なことを体験しても絶対ズレは修正できず、ズレは大きくなる一方です。やはり出発は愛着関係を深めるしかないと思っています。

このような働きかけは1～2才位までですと、非常に簡単です。3～4才になるとものすごく難しくなって、発達の歪みはかなりはっきりしてきますので、かなり強力な治療法を長期的にやらなければならないし、それでもとにかく愛着関係が深まっていくと、先ほど図に書いたように、情動の共有から、お互いの気持ちが通じ合う意図の共有レベルに持っていく、そういう関係を基盤に、楽しい、時には不愉快な、つらい、といった様々な体験を一緒に大事にしていく。まず楽しい体験をしないと建設的な方向に行きません。最初っから怖い体験をするとこの人という怖いことばかりだと嫌われますから。

こういう関係を基盤にして、望ましい言語発達、認知の方向に向けていくことが大事なんですね。自閉症の人がどうして歪んだ言語発達、認知を示すかという、心の通じ合うような関係の中で、同じ土俵で、同じ視点で体験していないから、色々な働きかけを受けなくてもこちらの意図と彼らの意図とがずれるために、言葉の意味合い、言葉の背景に流れる体験のイメージががずれてしまう。そこが自閉症の人への働きかけとして一番気をつけなければいけない事ですね。

是非気をつけていただきたいことは、対人関係の発達段階は、まず最初に自分にとって一番安心できる人との関係の中で十分に体験の基盤を蓄積して、そして次に第三者関係（兄弟、身近な人への広がり、年上の人）その先の先に同年齢の子との交流が可能になるという順序をもっていることです。その対人関係の発達の段階で、基礎になる関係を成熟させないまま、集団療育へともって行ってしまおうと、彼らにとってその体験は恐怖の世界になってしまう。従って回避傾向を強めてしまいます。でも、お母さんとの関係の中に充分

楽しい関係が蓄積されていると、ものすごく他のものへも世界を広げていきます。

私が今やっている治療の中で驚いたのは、お母さんにはべたべた甘えていて、お母さんは一生こんな風につき合っていかなければならないのかとある種の焦りを感じるくらいだったんですが、お父さんとやって来たら全然様子が変わるんです。べたべたしない。母親と父親では子供の相手の仕方が違う。お父さんは物を介した遊びが上手で、外に向けた活動を働きかけます。そうするとどんどんお父さんと遊びはじめて、お父さんが疲れて休んでも「起きろ起きろ」といって遊びたがるんです。ですから、お母さんとの間に愛着関係が深まっていくと必然的に彼の中に次の段階を求める欲求が起こってくるんです。そういう風に持つていくことが重要ですね。あせってはいけない。必ずその子の成熟の度合いによって、今の段階を見極めて、方針をステップバイステップで立ててやっていく。回避傾向が弱まってきて、誰に対しても安心して寄って行くようになると、構造化された中での認知発達レベルに合わせた働きかけがピタッとくるんだと思うんですね。とにかく、彼らにとって出来る課題を取り上げてやって行くことがそこで非常に生きてくるわけです。

ただ残念なことに現在の自閉症治療でこの情動レベルの関係についてどういうステップを踏んだら良いかということの実践研究はほとんどの人がまだ手をつけていないという状況にあると思います。

結局、その子どもの気持ちがどこを向いているか、それに我々がいかに合わせられるか。また、我々の気持ちや意図を子どもに伝えられる関係にどのようにしてもっていったらよいか。その両方の視点が大事だろうと思います。子どもの意図にばかり合わせているとそれは子どものペースにはまってしまって、なかなか動きが取れない状況になります。その気持ちが通じ合う深まる関係にありますと、我々が誘い込むようにしてやると、フッと誘い込まれていくんですよ。どんなに重いお子さんでも可能だと思います。

一方で子どもの中にかなり力がある、将来的にアスペルガーと言われる高機能のお子さんになるだろうなという子の親との交流を見ていると、子どもの意図に親が添えていないというのをものすごく感じるんです。最も困るのは親が子どもに対して高い要求水準を設けて次々に課題を乱発するという働きかけをすることですね。そういう働きかけをせざるをえない親の気持ちの背景には実にさまざまな要因があります。介入的、侵入的な働きかけにならないように、どう子どもの気持ちに添ってやれるように持つていけるかということが大事になります。親の側の親の欲目や、周りの人の目を気にするとか、嫁姑のしがらみとか、早期教育に盲信してしまっている等、親の気持ちの背景にはいろいろなものがあるわけですね。その背景を取り除いて、今、その場で子どもの気持ちに全面的に添うことに没頭できるような心理状態にお母さん方がなったださって、子どもの意図を読み取って、的確に応えるようになってくると、子どもはすごく楽しくなるんですよ。そうすると、物や数字に没頭していた子どもも楽しくなると、お母さんにしっかりとくっついて、そしてくっつきながら物を扱ったり楽しむようになってくるんですよ。そうしますと、親もひとりした気持ちで子どものペースに合わせて、うまい具合に働きかけることができるようになってくる。ですから、決して子どもの側からだけ見て、自閉症の療育は考えられないし、やはり、こちらが彼の気持ちを分かるという面も重要な要因として考えなくてははいけない。子どもと意図を共有するという関係を困難にしている要因はいろいろとあります。でも自閉症の子とそういう事がピタッと合ってきますと後は彼らの独特のもの見方、

とらえ方、興味の方向がありますので、それは個性的だろうと思うんで大事にしながら接して行く必要があります。それは重要なことで、年長の人への働きかけで、その道に秀でた人が相手をして指導すると、その人の言うことをよく聞いて、一生懸命頑張るということがよくあります。十数年前イギリスの自閉症協会に行ったときに、スタッフの一人が「自閉症の療育で必要なのは自閉症の専門家ではない。グリーンフィンガーが大事だ」と言っていました。グリーンフィンガーというのは、園芸・庭造りを専門にやるプロの人をたとえていったわけで、その道に秀でた人という意味合いですけれど、そういう人が技術を教えると、自閉症の子はある種の職人気質があるものですから、非常に一生懸命没頭して、見習おうとするということがあります。ですから、中途半端なことをしてはいけないという気がします。彼らはあまり良くできないからまあ適当にお茶を濁して教えておこうなんて事をしていると全然だめですね。やはり、その道に秀でた人の中にある何か鬼気迫るものに彼らにとって引かれるものがあるようです。

8. おわりに

色々お話してきましたが、出発点として、自閉症の人が持っている、接近と回避に対するアンビバレンスという心性をどう緩和していくかという事が治療の中で一番求められている気がします。それをうまく通り抜けていくと愛着関係が深まり、それを基盤にして体験を蓄積するようになります。最初は遅々として進まないようであっても、実は彼らの内面は非常に深く良いものが蓄積されていきます。

彼らは一見何もしゃべれないようですが、実はしゃべらないという側面もすごく強いのではないかと思います。言葉を介していうことは出来ないにしても行動でもって意思を示しています。それを我々はなかなか読み取れない。それを読み取る関係になっていったら、彼らは初めて安心してそこで言葉を発する事ができるようになる。ここをうまく乗り切れば、一般的な育児のプロセスと同じことを踏まえていけば良いと僕は思っています。しかし、スローモーションビデオでみるように、ゆっくりゆっくりとしか変わらないということがありますから、根気よく、回りのペースに動かされないでやって行けるか、その為にはやはり、何重にもいろいろな人の支えと、ネットワークと応援がなければうまくいけない。どうしても回りのペースに引き込まれて、強引な介入がなされて混乱してしまうということが、実にたくさんあるだろうという気がします。

理論的に考えると決して難しい事は何もないと思います。乳幼児の情緒発達ないし発達の中にもっともっと学ぶことがあるんだろうということです。

これで私の話は終わりにしたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

質問の時間

Q : パニックになった時、場面をはずし、一人にしると言われますがどう思いますか。
(教室で14才の生徒の指導をしています)

A : 好ましくないと思います。一人になって解決する道を覚えると、終生回避傾向が強まります。回避傾向が強まるというのはどういうことかということ、一生自閉症ですね。一生自閉症という言い方も語弊がありますが、つまり、対人関係が生まれにくいわけです。人との交流が生まれにくいのは自閉症の持っているハンディキャップはいい方向には絶対に行きませんから、パニックを起こした時、いろいろなやり方がその人その人であると思うんですけど、結局はつき合ってやることですね。つき合い方も、僕であれば気持ちが静まるまで抱きしめてやるとかね、例えば刺激の少ない所において、スタッフがその場で一緒にいてやり、だんだん気持ちがおさまってくるのを同じように側にいて、「アーだいぶ落ち着いたね」とこちらも感じ取って一緒に味わってやるというのでしょうか、側に人がいると気持ちは救われますよね。やはり喜びは人と一緒に味わうことで大きくなるしょ。

Q : 子どものパニックについてですが、幼少の頃より以前ならパニックになっていたであろう事が我慢できるようになって、回数も少なくなったのですか、一回一回のパニックの激しさが増していくように思われる。パニックが起きないように親が気をつけた方がよいのでしょうか、それともパニックが起きて悪いことは悪いと教えたほうがよいのでしょうか。ちなみにてんかん波はあるようです。投薬はありません。てんかん波のある子は興奮させないようにという話も聞きましたが、...。最近のパニックの原因は私とのやり取りで自分の行動が否定された時です。

A : 私には子供が2人おりまして、高1の娘と中2の息子ですが、会話の時娘の気持ちを逆なでして否定するとパニックを起こしますね。でもガラスを割るようなことをしないのでホットしているのですけれど。僕に似ていて気持ちが激しくて往生しているのですけれど、誰でも同様な気持ちになるわけですね。いいデータがあります。静岡大学の杉山さんがパニックを起こすようなこだわりのある子が将来有望だというデータを出していますよ。それを見てもものすごくうれしかったですね。それは冗談ではなく、逆説的になるようですけれども、今までこだわりを一生懸命なくそうなくそうと多くの人が教育の中でやっていたようですね。その方向転換しなくてはいけないと思います。パニックは最後のあがきですよ。自分を失いそうな時の最後のあがきで、パニックが起こらなくなったらまず自発性がなくなりますよ。非常に無気力になってひどくなると時として飯も自分で食べようとしなくなる。そういうことだって起こるんですね。ですからそれは戦いですがパニックはある程度仕方がないと受け取ったほうがよいのではないのでしょうか。

Q : 母親との関わりを強調されていましたが、幼児期に限らず青年であっても基本的な考

えてよいのか。母親でなく、施設の職員に対しても同様に考えてもよいのか。ハイファンクションの子どもの例をあげていたが本質は同じということですね。母原病と誤解されないか。

A : 必ず誤解されますね。本質的に自閉症の子の育て方は普通の育児と同じだと僕は思っています。育児の中で母親の重要性は誰でも考えていると思うんですけど、自閉症の場合も同じことです。母親が原因とさらさら思っていませんけれど、しかし、こちらのやり方次第でいくらでも彼らは変わるとするのは間違いない。自閉症の人の持っている最大の特徴はアンビバレンスだと、今僕は一番大事なことだと思っているんです。これをとにかくこわさなくてはいけない。それも望ましい形で。そして安心できる関係をまずは養育者との間で作ることです。主たる養育者は母親の場合も父親の場合もあります。療育者の場合もあろうし、当然我々の場合も有りうる。同じ事が言えます。ですから母親に代わって我々が全面的受け止めてやるということも考えなくてはいけない。母親を療育者という言葉でおき代えて考えていただいて問題ありません。あと、年長のお子さんの場合も同じことが言えると思います。この情動のレベルでのお互いの気持ちがピタッと合う関係になっていないんですよ。それをどうやったらできるのかというのは点では基本的考え方は同じです。でもやり方は色々あるだろう。ケースバイケースで考えざるを得ない。

Q : 今は情緒が安定して勤めも休まずに行っています。勤め先の面倒を見てくれる方が良い方です。ただ、友達がいないという事と、異性のことが気がかりになります。友達を作る手立て、たとえば寮があればそこに住まわせるか、結婚については一時期兄が結婚した時は口に出して言っていました、今は言いません。特に女性に接近しようという傾向も見られません。マスターベーションはします。無理に友達を作る必要はないのでしょうか。結婚相手を見つけることは特にする必要はないのでしょうか。
(34才の男性、独身、就労、自閉症の人の親)

A : 自閉症と言われる人達も全く基本的には同じですから、本人が結婚したい気持ちがある時結婚するにはどうしたら良いかとこちらが教え、そしてその気になれば結婚させられればと思うんですね。ただし、ただしですがここはオフレコで、情動の共有というのは大なり小なり彼らにとって一番しんどいところだろうと思うんですね。気持ちがぴったりと通い合う、その究極の姿、ぴったり気持ちが通い合って一心同体になるのは男女の性に見ることができると思うのです。となると彼らにとっては(性生活のない結婚生活など僕にとって考えられないことですが)性生活のない結婚生活が望ましい結婚なのかもしれませんね。ある人に聞くとアメリカで結婚した例では寝室が別だということです。したがって結婚も我々の考える結婚とは違うし、違って良いだろうと、そういう意味で結婚は大いにありうるだろうと思います。異性への関心はいっぱいありますよ。ないのはおかしいですね。おそらく抑圧しちゃって、そういう異性への関心をなくしている人もあります。基本的には思春期になればムラムラした感情は起きますし、それを異性への関心というか、異性へアプローチするという形はなか

なかできないですね。従って色々な形に表現が歪みますね。あまりお子さんがそういう感情を持ってはいけないと親がサインを送るわけでしょう。ちょっと身構えたりしますよね親は。そうすると敏感に察して、あっ、これはいけないことだと思うんですよ。あるお子さんはマスターベーションをやり出して、寝室でやっていたらお母さんが見ちゃって、ダメじゃないのと言われて、それから「マスターベーションしません、しません」と言いながらするようになったんですね。そうするとマスターベーションに対する罪悪感がものすごくあるのです。マスターベーションはきわめて生理的なものですが、一番いけないのは罪悪感ですね。本人の欲求を歪めて、間違っただけの意図付けをしてしまいますね。そうすると奇妙なことをおこすんですよ。抑圧するんですね。どういう事が起こるかというと、テレビを見ながらリモコンを持っていて、女性アナウンサーがしゃべり出すと音声を消すんです。男性アナウンサーがしゃべり出すとONにする。それとか、ある大人になった人できれいな女性が向こうから来ると、異性への関心を否定しようとしてわざと見ないふりをするんです。

Q：場面緘黙について、他者や親の叱責で表情が能面のようなになる11才の子

A：場面緘黙と自閉症のお子さんがしゃべれないというところにある点で非常に似ている点があると思っていますね。

彼らに濃厚な治療をやっていると治療者も親も子も本当に非常に一心一体という感じになってくると、思わず声を上げるんですよ。言葉を。うれしい！とか、やって！とか、苦しい！いやだ！とか言うんですよ。そういう気持ちがピタッと一つになった時はじめて人間は心が開くんだと思うんです。そうなるとおそらく彼らは思っていた色々な思いが言葉足らずのちょっとした言葉だけれど発しますよ。そういう風な深い関係までなかなかもっていかないとしない、治療の中でそれをもっていくのはものすごくしんどい事だと思います。かなり気持ちがお互いの中で深まりができてきて一心同体だと思うことですね。それが持てた時には安心して発声するんですよ。そんな気がします。場面緘黙の人は回りの人に対して警戒的で回避的ですから、それが安心できると、そしてお互いの間で本当に深まっていくと緘黙が改善してくるでしょう。自閉症の人が緘黙と同じとは言いませんが、思っているも言葉が発せられないという一面があるのは間違いないと思う。もちろん思っていること感じていることを言葉でどう表すかというのは次元の異なった話です。でも、色々な思いは我々と同じようにもっているんだろうと思うし、それは言葉のない世界で彼とつき合っていると手に取るようにわかりますね。こういう治療をやっていると親は手に取るようにわかってきます。これが一番大事なことなんじゃないかと思いますね。

講演の録音テープを掘り起こしていただいて改めて内容を吟味してみると、その内容の粗さに驚くとともにきめ細かい詰め甘さを痛感させられました。講演と原稿では相手に伝わる内容も随分異なりますので、このような形で講演内容を原稿にしてしまうと、すべて書き改めてしまわないといけないような強迫観念にとりつかれてしまいます。しかし、誤解を恐れずに自分の思いを語ったものですので、可能な限り講演内容を忠実にお伝えするしかないという覚悟を決めた次第です。

しかし、ご質問にもありましたように、小生の講演内容が「自閉症は母原病である」との受け止め方をされることを大変恐れております。自閉症の人々になんらかの脳機能の問題が存在していることは確かですし、そのことがコミュニケーションの問題をより複雑にしているわけです。対人回避傾向が異常に強いのも何らかの生来的な問題があるのかもしれません。

ただ、今回の講演でお伝えしたかった最大のポイントは、自閉症といわれる人とのコミュニケーションが成立していくための療育上の戦略を考える上でどのような視点が大切かということでした。それは具体的には情動水準のコミュニケーションがまずもって深まっていくような関係を親子の間で作っていくことであって、そのことは治療的努力でかなり可能性は高いものと思っています。このような情動水準の働きかけが、実は自閉症にみられる言語認知面の多彩な障害をかなり軽減させていくことを可能にするのではないかと私は考えているからです。なぜなら人間にとって言語認知機能の発達、情動水準のコミュニケーションが養育者との間で深まっていくことを抜きにしては考えられないことが最近の乳幼児発達研究の中で示されているからです。

養育者（親）のことを話題にすると必ずといっていいほど自閉症心因論への回帰だと短絡的に反応する人がいます。しかし、人間の発達をめぐる問題は、どれが原因だと容易に決めつけられるような性質のものではありませんし、おそらく人間の発達現象は多くの要因が複雑に錯綜しあって展開していくものしょうから、どれが一義的な原因かといった原因探しの議論は生産的ではありません。それよりも自閉症にみられる病態ないし症状がいかによれば軽減ないし消退するかを、実際の自閉症の子どもの対人交流の特徴を丁寧に観察しながら検討することが、最も現実的な方策のひとつではないでしょうか。そのような試みが持続して行われたならば、彼らの発達像はこれまで語られてきたものからは随分と改められたものになる可能性は大いにあると私は想像しています。九州・山口地区でわれわれが係わってきた自閉症児の追跡調査結果が国際的にみても非常に良好な結果を示していたことを考えると、われわれの努力次第で今後もさらにもっともっと自閉症の人々の発達は好ましい方向に行くのではないかと期待していますし、そうなるだろうと確信しています。

- 病院の診療日：東海大学病院精神科児童外来 小林担当日
毎週月曜日

新患受付時間 午前8時30分より11時30分まで

問い合わせ先：TEL 0463-93-1121 内線3260（精神科外来受付）

- 健康科学部の治療：毎週金曜日実施，受付は病院の診療日（毎週月曜日）

問い合わせ先：TEL 0463-93-1121 内線4255（研究室）

直通0463-90-2034, FAX 0463-90-2073

E-mail ryuji@is.icc.u-tokai.ac.jp

